
Funny S

青春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Funny

【ZPDF】

Z5796D

【作者名】

青春

【あらすじ】

結局、わたしには救いの王子さまとか、伝説の勇者とか、運命の人とかが助けに来てくれることもなく、大衆の前で好きでもない人と愛の誓いを宣言しちゃって、そして今から夜を共にしなきゃいけない。なんて不幸なんだろう…。

結局、わたしには救いの王子サマとか、伝説の勇者とか、運命の人とかが助けに来てくれる事もなく、大衆の前で好きでもない人と愛の誓いを宣言しちゃって、そして今から夜を共にしなきゃいけない。なんて不幸なんだろう。

かなりの憂鬱を抱えて、「夫」になつた人のいる部屋に向かう。いまここで魔物がこの城を壊してくれたらどんなにいいだろうか。いつその事、魔王に拘つたほうがマシに考え思えてくる。いや、それはそれで嫌か。

扉は思つたよりも大きくて、冷たい。一生この扉を開けたくないけど、開けなきゃならない。開けなければ、なんのために自分を殺してまでも結婚したか分からぬ。

ただ、少しだけ猶予をもらつことにした。彼を思つ、最後の時を。だつてさ、五年前の話とはいえ、好きだった男の子だよ？消息が分からなくなつていなくなつてしまつたけれど、もしかしたら彼がわたしを助けてくれるかもしれないと期待してたのよ。ずっと、誓いの言葉をするまで期待して待つてたの。

けれどやつぱりそんな素敵なお話が起つるわけなく、結局この国の王子と結婚したわけだ。最低。

もしかしてわたしつて夢の見すぎ？「もしかしたら」「を思つすぎ？」もう、「彼」のことを思つるのはこれでやめよう。これでさよならだ。

「ばいばい」

呟いて、思い切り扉を開ける。はしたないかと思ったが、意気込みは大事だ。

ただつひろい部屋の中央に、金髪の青年が立つて私を見つめた。

嫌いじゃないし、好感も持てるけど、それとこれは別だろ？ああ、消息のたつた「彼」がこの人だった、ってオチだつたらいいのに。まあ、こんなに綺麗な金髪じゃなくて、「彼」は明るい茶髪だったけど。って、いけないいけない。忘れるんだつた。

「これから……よろしくお願ひしますね」

にっこりと笑ってくれて緊張も解れるんだけど、やっぱり「他人」って気がしてしかたないんだよね。どうしよう、ホントこれから。そして手を差し伸べられる。わたしは一瞬戸惑つた。けれど、いまさら握らないなんて馬鹿らしい。

ああ、さよなら私…………

なんて何度もか分からぬ覚悟を決めた瞬間、高らかな音が響いた。

「だ
ツツー…………」

びびつた。

ホントに。

だつていきなり窓われるんだよ！？そりやもう派手にさ……！

わたしと王子が呆然と窓下に蹲る影を見つめていると、いきなり影が立ち上がる。それにあわせてわたしたちもビクリと身体を震わ

せた。

「え　っ　と、間に合つた？間に合つたよな？あ、よかつた、まだ大丈夫そうだ」

そうして侵入者は緊迫した空氣に似合わずにヒヒと笑つた。それは初夏のすがすがしい口差しのようだ。

それが過去の思い出としてフラッシュバックした。

「あ　　フ――――――」

あまりに驚いてそう叫びながら男の子を指差すしかなかつた。その指は震えてる。少年はそれに嬉しそうに答える。

「よかつた！　もしかして忘れらてるんじゃないかなって思つてたんだよな！　その様子じやあ大丈夫そつ。よかつたー」

ほつと胸をなでおろす少年はわたしの返事を気にするでもなく、口を次々に開く。

「いやあさ、ホントはかつてよく結婚式の時にやられただ――みたいないことしたかったんだけどさあ、運悪く山賊に襲われちゃつて、そいつら相手してたら遅くなつちゃつてさ――悪い悪い。でさ、この部屋にいるつてのはわかつたけど、もしも……ほら、アレな最中だつたらどうしようかと思つたんだよな。流石にきまづいつしょ。しかも助けるタイミング悪くて俺もかつて悪いし。けど、まあ迷つてる暇もないし、取り合えず部屋に飛び込もうつて思つて、こーして窓割つてきたわけなんだけど、いやあ、ほんとよかつたよかつたあ

そこまで一気に少年は言つてから、今度はつかつかと王子のほうに近寄つた。王子は剣を手にするでもなく、ただ少年を凝視していた。

「あ、あんたが一リアルラの相手。いやあ、ほんとかつこいいな、アンタ。うん、相手として申し分ないわ。もしかして俺、よけいなことしちましたか？」

最後の問いかけはわたしにだ。わたしは必死に横首を振る。すると少年は嬉しそうににかつと笑つた。

「うふ、そつか。じゃあやることはただひとつだよな？」

そうして彼はわたしを抱き上げて いわゆるお姫様抱っこをして、破壊した窓枠に足をかけた。相変わらず王子は動かない。

「ちやんと掴つてろよ？」

「う、うん」

頬が上氣する。いいのかな、ほんとこ、こんな展開で。

「じゃ、お姫さんは俺がいただいてくぜー！」

やつしてわたしたちば、宙を飛んだ。

「お腹すいてないか？何か呑む？それとも疲れた？寝る？」

わたしは次々に尋ねられ、答える暇もない。ただ、最後の問い合わせには首を振つておいた。

「まだ眠くないのか。じゃあ昔話でもしようか」

ここにここ笑つてわたしの隣に腰掛ける。この馴れ馴れしさ、よくも五年越しにできるものだ。

わたしは黙つて彼を睨みつけた。やつと彼はわたしの不機嫌さに気がついたらしい。

「ん？ どした？ 顔色悪いぞ？」

彼の鈍さに頭こきて、わたしはキレた。

「……………遅いわよ……………」

「へ？」

ギッと彼を睨んで思い切り彼の頬を叩いた。

「つたあ…………何だよ…………」「何だよ、じゃないわよ…………」

わたしの怒鳴り声と形相に驚いたのか、彼は頬に手を当てながら固まっていた。

「遅いのよ、遅い！！！なんで結婚式までに来てくれなかつたのよ！！！どうしてわたしがあんな男に誓いの言葉を捧げる前に助けてくれないのよ…………？」

「ええつ…………でもスーパー・ウルトラ・ピンチ前には助けたじゃん！！それじゃ駄目なのか…………？」

「当たり前でしょ…………？」

彼はどうしてわたしが怒つてゐるか分からないらしく、困つたようにおろおろしていた。

わたしは目頭が熱くなるのがわかつた。

「そりや、アイツなんかに触られる前に助けてもらえてよかつたけど、けど、わたし、あの人と結婚しちやつたんだよ？『妻』になつちやつたんだよ？そんなの、すごく嫌なのに。結婚するのは好きな人とがよかつたのに」

ぱるぱると涙が零れる。彼は慌てながらも抗議する。

「そ、そんなのいいじゃんか！好きなヤツと結ばれれば別に…………」「そんなことないよ！わたしにとつては重大だよ…………」

思い切り腕で田を拭く。そして再び彼を睨む。彼は頭を搔きながら、小さく、でもはつきりと言葉にした。

「お前はさ、儀式とか形に縛られすぎだよ。いいか、お前の心がこもっていない『誓い』なんて無効なんだ。だから、お前はアイツの『妻』でもないし、結婚したことにもならない。そうだろ？それともお前は、アイツのことが好きなのか？」

「違うッ！――！」

激しく否定すると、彼は硬い表情を崩した。

「ん、じゃ大丈夫だ。まあ、そこまでお前が気にするんだつたら……」

「

そうして彼は立ち上がり、すばやくドアに手をかけた。

「いいか、そつから動くなよ！」

訳がわからない間に、彼は早々と部屋を出て行つた。

すぐに帰つてくると思つてたのに、なかなか彼は戻つてこなかつた。心配になる。今頃わたしを探すために城は必死になつているだろう。彼は兵士に捕まつてしまつたのかもしれない。そう思つと、背中がゾッとした。

わたしが嫌な考えをいくつも考えていると、彼は出て行つたときのように飄々と現れた。

「ちょっと、どうこうつてたのよ――」
「わっ！」

いきなり掴みかかつてきわたしに彼は驚いたらしく、少しそうけた。

「心配になるじゃない！あなたがもしかしたら……で

そうして俯く。なんだか恥ずかしくなつてきて、最後のほうは小声になつた。急に顔が熱る。

「え…………」「めん。これ、手に入れに行つてたから……」

顔をあげて彼が持つているものに目を向ける。わたしはわけがわからなくて目を瞬かせる。

「へ、これ……って」

銀に輝く小さな指輪だった。ガーネットが嵌つていて、いたつてシンプルなものだった。今日王子からもらつたものから比べれば、質素で値段など天地の差があるだらう。けれど、わたしにはそれが輝いて見えた。

彼は微笑んだ。

「お前、なんか結婚云々が気に食わないみたいだからさ。じゃあさ、今ここで、俺と誓おう？それがお前の『初めての結婚式』になるから

「な、何それ……」

『初めての結婚式』って、わたし、そんなに結婚式するつもりないわよ。

それに、この人は結構思い込みが激しいといつうか、当然と思つて口にしている言葉が相手の確認ナシといつうのが恐ろしい。

「わたしがあなたと結婚するって、本気でやつ思つてるの？」

そうすると、彼は豆鉄砲をへりつたよつた顔をした。

「え、お前俺が好きなんじやないの？」

なんだ、この自己中心的な男は。最低だ。

けど、その表情があまりに可笑しくて笑つてしまつた。彼はかなつづりたえた。

「え、マジ！？ それじゃあ、俺つてかなり滑稽じやんかよ……うわー、マジ恥ずかしいんですけど……」

顔をこれ以上ないうへりつて真つ赤にして俯く彼はとても可愛い。わたしは助け舟を出すことにした。

「でも、困つたな。わたし今日の結婚がトラウマになつそつなのよねー。あーあ、誰か他に結婚してくれる人いないかしら」

ちらりと彼を見ると嬉しそうに破顔した。

「じゃあ、俺はどうですか？」

そして手を差し出す。されば、ずっとわたしが望んでいたものだつた。

「…………お願いします」

「とにかく躊躇いもなく、その手を握りしめた。

彼はわたしがつけていた指輪を外すと、その左の薬指に口付けをして、そこに彼からの小さいガーネットの指輪を嵌めた。そして、わたしの左手を掲げたまま真っ直ぐにわたしを見据えた。

「俺は、ずっとリアルワの傍にいます。それをここに誓います

わたしも懸命にそれに応える。

「わたしも、わたしも誓います。ずっとずっと一緒にいる」とを…

セイで長じ道のことを経て、わたしは彼の名前を呼んだ。

「と一緒になることを…

「…

最後はやつぱつ、いつでもくちばいだつて、わたしのこの物語のヒロインですもの。

(後書き)

拙い文章だと思いますが、お読みくださって有難うござります。
この作品は正直お恥ずかしいストーリーなんですが、まずは短編を
書いてみようといつ意気込みで投稿させていただきました。
「彼」のズレた所は気に入っているので、もつりょっと長くお話を
中で動かして見たい気もありました。
ただ、恋愛のお話はかなり苦手なので、これから精進していきたい
と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5796d/>

Funny s

2010年10月21日21時55分発行